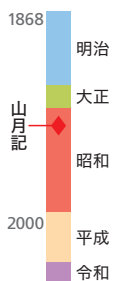


# 山月記

中島敦 なかじまあつし



1 隴西の李徴は博學才穎、2 天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、**6** 狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、**7** 賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、**8** 故山、**9** 號略に歸臥し、人と交わりを絶つて、ひたすら詩作にふけた。下吏となつて長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚がらず、生活は日を逐うて苦しくなる。李徴はようやく焦燥に駆られてきた。この頃からその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみいたずらに炯々として、かつて進士に登第した頃の豊頬の美少年のおもかげは、どこに求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のために節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩は既にはるか高位に進み、彼が昔、鈍物として齒牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の儁才李徴の自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難くない。彼は快々として樂まず、**15** 狂悖の性は

- 1 隴西 中国甘肅省東南部の地名。
- 2 才穎 才能が抜きん出ている様子。
- 3 天宝 唐の玄宗皇帝時代の年号（西二七五）。
- 4 虎榜 官吏登用試験（科擧）合格者（進士）の姓名を掲げる板。
- 5 江南尉 江南は長江下流の一带。ここでは浙江省辺りをいう。「尉」は昔中国で軍事や警察などのことを扱った官。
- 6 狷介 固く自分の意志を守り妥協しない様子。
- 7 賤吏 身分の低い官吏。
- 8 故山 生まれ故郷の地。
- 9 號略 河南省西部の靈宝市の地。

よいよ抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、**16** 汝水のほとりに宿った時、ついに発狂した。ある夜半、急に顔色を変えて寢床から起き上がると、何かわけのわからぬことを叫びつつそのままに飛び下りて、闇の中へ駆け出した。彼は二度と戻つてこなかった。付近の山野を搜索しても、なんの手がかりもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった。

- 10 歸臥 官を辞して故郷に帰り、静かに暮らすこと。
- 11 峭刻 厳しく、険しい様子。
- 12 登第 合格すること。
- 13 儁才 才能の優れた人。俊才。
- 14 快々 不満が募る様子。
- 15 狂悖 異常なまでに道理に背くこと。
- 16 汝水 河南省より発し、淮河に注ぐ川。
- 17 監察御史 各地を巡回し、役人の取り締まりに当たった官。
- 18 陳郡 河南省東部にあった郡。
- 19 嶺南 広東省・広西壮族自治区の一带。
- 20 商於 河南省西部の地名。
- 21 駅吏 宿場の役人。

翌年、監察御史、陳郡の袁倓という者、勅命を奉じて嶺南に使いし、途に商於の地に宿った。次の朝はまだ暗いうちに出発しようとしたところ、駅吏が言うことに、

- 19 嶺南 広東省・広西壮族自治区の一带。
- 20 商於 河南省西部の地名。
- 21 駅吏 宿場の役人。



これから先の道に人食い虎が出るゆえ、旅人は白昼でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、いまし待たれたがよろしいでしょうと。袁倓は、しかし、供回りの多勢なのを待み、駅吏の言葉を退けて、出発した。残月の光を頼りに林中の草地を通っていった時、はたして一匹の猛虎が叢の中から躍り出た。虎は、

- 15 狂悖 異常なまでに道理に背くこと。
- 16 汝水 河南省より発し、淮河に注ぐ川。
- 17 監察御史 各地を巡回し、役人の取り締まりに当たった官。
- 18 陳郡 河南省東部にあった郡。
- 19 嶺南 広東省・広西壮族自治区の一带。
- 20 商於 河南省西部の地名。
- 21 駅吏 宿場の役人。

あわや袁愔に躍りかかるかと思えたが、たちまち身を翻して、もとの叢に隠れた。叢の中から人間の声で「危ないところだった」と繰り返してつぶやくのが聞こえた。その声に袁愔は聞き覚えがあった。驚懼のうちにも、彼はとつさに思いあたって、叫んだ。「その声は、我が友、李徴子ではないか？」袁愔は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかつた李徴にとつては、最も親しい友であった。温和な袁愔の性格が、峻峭な李徴の性情と衝突しなかつたためであろう。

22 峻峭 険しく、厳しい様子。

叢の中からは、しばらく返事がなかつた。しのび泣きかと思われるかすかな声の時々漏れるばかりである。ややあつて、低い声が答えた。「いかにも自分は隴西の李徴である」と。

袁愔は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに久闊を叙した。そして、なぜ叢から出てこないのかと問うた。李徴の声が答えて言う。自分は今や異類の身となつていゝ。どうして、おめおめと故人の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ずきみに畏怖嫌厭の情を起こさせるに決まつているからだ。しかし、今、図らずも故人に会うことを得て、愧赧の念をも忘れるほどに懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、我が醜悪な今の外形を厭わず、かつて君の友李徴であつたこの自分と話を交わしてくれないだろうか。

23 久闊を叙した 無沙汰の挨拶をした。

24 畏怖嫌厭の情 恐れ、嫌悪する気持ち。

25 愧赧の念 恥ずかしくて赤面する思い。

後で考えれば不思議だつたが、その時、袁愔は、この超自然の怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかつた。彼は部下に命じて行列の進行をとどめ、自分は叢の傍らに立つて、見えざる声と対談した。都のうわさ、旧友の消息、袁愔が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかつた者どうしの、あの隔てのない語調で、それらが語られた後、袁愔は、李徴がどうして今の身となるに至つたかを尋ねた。叢中の声は次のように語つた。

今から一年ほど前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊まつた夜のこと、一睡してから、ふと目を覚ますと、戸外で誰かが我が名を呼んでいる。声に応じて外へ出てみると、声は闇の中からしきりに自分を招く。覚え、自分は声を追うて走り出した。無我夢中で駆け歩いていくうちに、いつしか道は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地をつかんで走つていた。何か身体中に力が充ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えていった。気がつくと、手先や肘のあたりに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映してみると、既に虎となつていた。自分は初め目を信じなかつた。次に、これは夢にちがいないと考へた。夢の中で、これは夢だぞと知つてゐるような夢を、自分はそれまでに見たことがあつたから。どうしても夢でないと思へばならなかつた時、自分は茫然とした。そうして懼れた。全く、どんなことでも起こり得るのだと思つて、深く懼れた。しかし、なぜこんなことになつたのだろうか。わからぬ。全く何事も我々にはわ

からぬ。理由もわからずに押しつけられたものをおとなしく受け取って、理由もわからずに生きてゆくのが、我々生き物のさだめだ。自分はすぐに死を思った。しかし、その時、目の前を一匹の兎が駆け過ぎるのを見たとき、自分の中の人間はたちまち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ました時、自分の口は兎の血にまみれ、あたりには兎の毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな所行をし続けてきたか、それはとうてい語るに忍びない。ただ、一日のうちに必ず数時間は、人間の心が還ってくる。そういう時には、かつての日と同じく、人語も操れば、複雑な思考にも堪え得るし、<sup>26</sup>経書の章句をそらんずることもできる。その人間の心で、虎としての己の残酷な行いのあとを見、己の運命を振り返る時が、最も情けなく、恐ろしく、憤ろしい。しかし、その、人間に還る数時間も、目を経るに従ってしだいに短くなっていく。今までは、どうして虎などになったかと怪しんでいたのに、この間ひよいと気がついてみたら、おれはどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは恐ろしいことだ。いまま少したてば、おれの中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋もれて消えてしまうだろう。ちょうど、古い宮殿の礎がしだいに土砂に埋没するように。そうすれば、しまいにおれは自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い回り、今日のように道で君と出会っても故人と認めることなく、君を裂き食ろうてなんの悔いも感じないだろう。いつたい、

<sup>26</sup> 経書 儒教の經典。

10

獣でも人間でも、もとは何か他のものだったんだろう。初めはそれを覚えていたが、しだいに忘れてしまい、初めから今の形のものだったと思ひ込んでいたのではないか？ いや、そんなことはどうでもいい。おれの中の人間の心がすっかり消えてしまえば、おそらく、そのほうが、おれはしあわせになれるだろう。だのに、おれの中の人間は、そのことを、このうえなく恐ろしく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐ろしく、哀しく、切なく思っているだろう！ おれが人間だった記憶のなくなることを。この気持ちは誰にもわからない。誰にもわからない。おれと同じ身の上になった者でなければ。ところで、そうだ。おれがすっかり人間でなくなってしまう前に、一つ頼んでおきたいことがある。

袁俊はじめ一行は、息をのんで、叢中の声の語る不思議に聞き入っていた。声は続けて言う。

10

他でもない。自分は元来詩人として名を成すつもりでいた。しかも、業いまだ成らざるに、この運命に立ち至った。かつて作るところの詩数百篇、もとより、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在もはやわからなくなっている。ところで、そのうち、今もなお記誦せるものが数十ある。これを我がために伝録していただきたいのだ。なにも、これによつて一人前の詩人面をしたのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、一部なりとも後代に伝えないで

<sup>27</sup> 記誦 記憶し、そらんじること。

<sup>28</sup> 産を破り 財産を失い。

15

は、死んでも死にきれないのだ。

袁俊は部下に命じ、筆を執って叢中の声に従って書き取らせた。李徴の声は叢の中から朗々と響いた。長短およそ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁俊は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか、と。

29 意趣 ここでは、詩に盛り込まれた思い。

旧詩を吐き終わった李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るがごとくに言った。

恥ずかしいことだが、今でも、こんなあさましい身となり果てた今でも、おれは、おれの詩集が長安風流人士の机の上に置かれているさまを、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嘖<sup>わ</sup>つてくれ。詩人になりそなつて虎になつた哀れな男を。（袁俊は昔の青年李徴の自嘲癖を思い出しながら、哀しく聞いていた。）そうだ。お笑い草ついでに、今の懐<sup>おも</sup>いを即席の詩に述べてみようか。この虎の中に、まだ、かつての李徴が生きているしるしに。

30 長安 唐の都。現在の陝西省西安市。

袁俊はまた下吏に命じてこれを書き取らせた。その詩にいう。

偶<sup>たま</sup>因<sup>たま</sup>狂<sup>ツテ</sup>疾<sup>ニ</sup>成<sup>ル</sup>殊<sup>ト</sup>類<sup>ト</sup>  
災<sup>タ</sup>患<sup>ハ</sup>相<sup>ハ</sup>仍<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>逃<sup>ル</sup>  
今<sup>イマ</sup>日<sup>ハ</sup>爪<sup>さう</sup>牙<sup>ガ</sup>誰<sup>たれ</sup>敢<sup>あ</sup>敵<sup>セ</sup>敵<sup>セ</sup>  
当<sup>トキ</sup>時<sup>ハ</sup>声<sup>ハ</sup>跡<sup>ハ</sup>共<sup>ニ</sup>相<sup>ハ</sup>高<sup>カリ</sup>  
我<sup>ハ</sup>為<sup>ナリ</sup>異<sup>ト</sup>物<sup>ト</sup>蓬<sup>ぼう</sup>茅<sup>ぼう</sup>下<sup>もとニアレドモ</sup>  
君<sup>ハ</sup>已<sup>すで</sup>乘<sup>リテ</sup>輶<sup>えう</sup>輶<sup>ニ</sup>勢<sup>ハ</sup>豪<sup>ナリ</sup>  
此<sup>コノ</sup>夕<sup>ゆふ</sup>溪<sup>せき</sup>山<sup>ハ</sup>对<sup>シ</sup>明<sup>メイ</sup>月<sup>ツキ</sup>  
不<sup>シテ</sup>成<sup>サ</sup>長<sup>ちやう</sup>嘯<sup>せう</sup>但<sup>た</sup>成<sup>ス</sup>嗥<sup>かう</sup>

偶狂疾に因つて殊類と成る

災患相仍つて逃るべからず

今日は爪牙誰か敢へて敵せんや

当時は声跡共に相高かりき

我は異物と為りて蓬茅の下にあれども

君は已に輶に乗りて氣勢豪なり

此の夕べ溪山明月に対し

長嘯を成さずして但だ嗥を成すのみ

31 〈漢詩の注〉

狂疾 精神の病。

殊類 人間でないもの。

相仍 次々と重なつて。

声跡 世間の名声。

蓬茅 ヨモギとチガヤのこと。雑草の意。

輶 一、二頭の馬に引かせる

物見車。当時、官吏が乗用

した。

長嘯 声を長く伸ばして詩歌

を吟ずること。

嗥 獣が短くほえ叫ぶこと。

時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。人々はもはや、事の奇異を忘れ、肅然として、この詩人の薄倖<sup>はつこ</sup>を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

10

なぜこんな運命になつたかわからぬと、先刻は言ったが、しかし、考えようによれば、思い当たる<sup>32</sup>ことが全然ないでもない。人間であつた時、おれは努めて人との交わりを避けた。人々はおれを倨傲<sup>きようごう</sup>だ、尊大<sup>そんだい</sup>だと言つた。実は、それがほとんど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかつた。もちろん、かつての郷党<sup>きやうたう</sup>の鬼才と言われた自分に、自尊

なぜこんな運命になつたかわからぬと、先刻は言ったが、しかし、考えようによれば、

思い当たる<sup>32</sup>ことが全然ないでもない。人間であつた時、おれは努めて人との交わりを避け

た。人々はおれを倨傲<sup>きようごう</sup>だ、尊大<sup>そんだい</sup>だと言つた。実は、それがほとんど羞恥心に近いものであ

ることを、人々は知らなかつた。もちろん、かつての郷党<sup>33</sup>の鬼才と言われた自分に、自尊

15

32 倨傲 おごりたかぶる様子。郷党 村里。ここでは、生まれ故郷の村。

心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な自尊心とでもいうべきものであった。おれは詩によって名を成そうと思いつながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、また、おれは俗物の間に伍することも潔しとしなかった。ともに、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。

己の珠にあらざることを惧れるがゆえに、あえて刻苦して磨こうともせず、また、己の珠なるべきを半ば信ずるがゆえに、碌々として瓦に伍することもできなかった。おれはしだいに世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙慙とよつてますます己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが、各

34 碌々 平凡な様子。  
いきどおりもだえる  
こと。  
35 憤悶  
36 慙慙 恥じて憤ること。

人の性情だという。おれの場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これがおれを損ない、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、おれの外形をかくのごとく、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ。今思えば、全く、おれは、おれの持っていた僅かばかりの才能を空費してしまつたわけだ。人生は何事をもなさぬにはあまりに長いが、何事かをなすにはあまりに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とおれのすべてでつたのだ。おれよりもはるかに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者がいくらでもいるのだ。虎となり果てた今、おれはようやくそれに気が

15

ついた。それを思うと、おれは今も胸を灼かれるような悔いを感じる。おれにはもはや人間としての生活はできない。たとえ、今、おれが頭の中で、どんな優れた詩を作つたにしても、どういふ手段で発表できよう。まして、おれの頭は日ごとに虎に近づいていく。どうすればいいのだ。おれの空費された過去は？ おれはたまたまなくなる。そういう時、おれは、向こうの山の頂の巖に登り、空谷に向かつてほえる。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。おれは昨夕も、あそこで月に向かつてほえた。誰かにこの苦しみがわかつてもらえないかと。しかし、獣どもはおれの声を聞いて、ただ、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂つて、哮つているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人おれの気持ちをわかつてくれる者はない。ちやうど、人間だった頃、おれの傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかったように。おれの毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

5

ようやくあたりの暗さが薄らいできた。木の間を伝つて、どこからか、暁角が哀しげに響き始めた。

37 暁角 夜明けを告げる角笛。

もはや、別れを告げねばならぬ。酔わねばならぬ時が、(虎に還らねばならぬ時が)近づいたから、と、李徴の声が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それは我が妻子のことだ。彼らはいまだ號略にいる。もとより、おれの運命については知るはず

15

がない。君が南から帰ったら、おれは既に死んだと彼らに告げてもらえないだろうか。決して今日のことだけは明かさないでほしい。厚かましいお願いだが、彼らの孤弱を哀れんで、今後とも道塗<sup>38</sup>に飢凍することのないように計らっていただけるならば、自分にとって、<sup>39</sup>恩倖<sup>おんじやう</sup>、これに過ぎたるはない。

<sup>38</sup> 道塗 道。路頭。

<sup>39</sup> 恩倖 ひとかたならぬ恩恵。

言い終わって、叢中から慟哭<sup>40</sup>の声が聞こえた。袁もまた涙を浮かべ、欣んで李徴の意に添いたい旨を答えた。李徴の声はしかしたちまたまた先刻の自嘲的な調子に戻って、言った。本当は、まず、このことのほうを先にお願いすべきだったのだ、おれが人間だったなら飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような男だから、こんな獣に身を墮<sup>お</sup>とすのだ。

<sup>40</sup> 慟哭 大声で嘆き泣くこと。

そうして、付け加えて言うことに、袁憐が嶺南からの帰途には決してこの道を通らないでほしい、その時には自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかもしれないから。また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に登ったら、こつちを振り返って見てもらいたい。自分は今の姿をもう一度お目につけよう。勇に誇ろうとしてではない。我が醜悪な姿を示して、もって、再びここを過ぎて自分に会おうとの気持ちを君に起こさせないためであると。

袁憐は叢に向かつて、懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、また、堪え

15

得ざるがごとく悲泣の声が漏れた。袁憐も幾度か叢を振り返りながら、涙のうちに出発した。一行が丘の上に着いた時、彼らは、言われたとおりに振り返って、先ほどの林間の草地を眺めた。たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。虎は、既に白く光を失った月を仰いで、二声三声<sup>41</sup>咆哮<sup>ほうこう</sup>したかと思うと、また、もとの叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

<sup>41</sup> 咆哮 獣がほえたけすること。

5

● 中島敦 一九〇九（明治四二）年～一九四二（昭和一七）年。小説家。東京都の

生まれ。中国古典文学に親しむとともに、西洋の文学・哲学の影響も受けて、独自の作品世界を形作った。作品に「光と風と夢」「李陵」「名人伝」などがある。

■ 出典 『中島敦全集 第一巻』（一九七六年）

■ 初出 雑誌『文学界』（一九四二年二月）